
選択

弥amane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
選択

【Nコード】
N2336G

【作者名】
弥 amane

【あらすじ】
暗く狭い部屋。倒れている3人の人。暑苦しい空気。耳障りな換気扇の音。目の前の大きな2つの画面。死の時を刻む声。貴方なら誰を選びますか??

登場人物

【LEVEL:1】

高橋 優一 23歳。父・母・弟の4人家族。

恋人有り。もうすぐ結婚を控える郵便局員。

田村 和志 55歳。妻・長男・次男の4人家族。

普通のサラリーマン。年が過ぎてからの子供を大切に想っている。

鈴木 栄子 30歳。夫との2人家族。子供なし。

夫は某大手自動車会社の社長。そのため何、不自由なく毎日を過ごしている。

市村 誠司 34歳。妻・娘の3人家族。

出版社に勤める。子煩悩で愛妻家と評判。

【LEVEL:2】

小池 拓真 25歳。祖母との2人暮らし。

両親は生まれた時に離婚。祖母に預けられる。
食品会社に勤める祖母思いの青年。

杉浦 春菜 27歳。夫・息子の3人家族。

息子が2歳の時に離婚。今の夫は再婚者。
夫の暴力に逆らえず日々、自分を責めている専業主婦。

桜井 葵 15歳。父・母・兄の4人家族。

一般家庭で暮らすごく普通の中学生。ただし…

望月 美咲 19歳。父・母との3人家族。
恋人有り。厳格な父と過保護な母に育てられた大学生。

登場人物（後書き）

【生】 【死】 【愛】

についてこの作品から少しでも何かを感じてもらえたら幸いです。

【LEVEL:1】目覚め

「パパあ！！みてみて！！」

(…舞^{まい}もつこんなに大きくなったのか…ついこの間まで赤ん坊だったのにな。)

カタカタカタカタカタカタカタカタ

(うるさいな。なんの音だよ。)

カタカタカタカタカタカタカタカタ

(うるさいんだよ！！せつかく舞と遊んでるの…)

そこで目が覚めた。

「夢か…。」

そう呟いて自らの言葉に驚いた。

(夢…？なんで俺は寝てたんだ？確か会社から自宅に帰る途中じゃ…)

そう思っつて私は周りを見渡す。

カタカタカタカタカタカタカタ

そこは暗く狭い部屋だった。

コンクリート剥き出しの壁に小さないくつかの換気扇。

さっきからカタカタうるさいのはこの音だろう。

扉は見当たらない。

その事に驚きながらも私は別の事で更に驚いた。

自分の他にも誰か居る…

すぐ横に3人。

さっきまでの自分と同じ様に眠る人。

2人は男性でもう1人は女性。

「どこだここ…なんでここで皆して寝てんだ？」

そう私が口にした時だった。

私のすぐ隣で眠る男性が目を覚ます。

男性は私と同じように周りをキョロキョロ見てから、私と目を合わせます。

「どこ…どこですか？なんで俺ここに？」

男はそう私に質問するが私も状況は同じだと伝えた。

そうこうしているうちに他の2人も目を覚まし、私たちと全く同じ行動と言動をして4人とも不思議な顔をしたままそこに座っていた。

4人とも初対面の人間で会話はそれ以上する事が出来なかった。

なぜ自分たちがここに居て、

なぜ眠っていたのか…

誰も分からないまま。。

【LEVEL:1】2つの画面

4人で何が起きたのか分からない状況のまま一時が過ぎたのち…

コンクリートの壁に付けられた大きな2つの画面に映像が写し出された。

それはまるで古い映画のフィルムから出されるような映像で、とても読みにくいものだったのだが何も事が起きなかった中での唯一の変化に、4人ともその画面に目を奪われた。

おはようございます

高橋 優一さん（たかはしゆういち）23歳。

田村 和志さん（たむらかずし）55歳。

鈴木 栄子さん（すずきえいこ）30歳。

市村 誠司さん（いちむらせいじ）34歳。

気分はいかがですか？突然のことで驚かれたでしょう？しかし安心下さい。何も、皆さんをとって食おうなどという事はございません。

最初の映像にはこう書かれていた。

「なんですかコレ？なんで私の名前と年齢が？」

1番に発言したのは私の横に座っていた女性の鈴木栄子だった。

「これ…皆さんの名前で合ってるんですか？」

私から1番遠い位置に寝ていた若い男性がそれぞれの顔を見ては尋ねる。

「そう…みたいですね。私は市村です。」

私は男性に答える。

「なんなんですか？コレ？」

鈴木栄子が私に再度、質問する。

…が私にも分かるはずも無く

「私にもさっぱり…。」

と答えることしか出来なかった。

「見てください！！」

そう突然叫んだのは1番年配の田村和志。

田村が指差す画面に目を戻すと…画面には新しい画像が照らし出さ

れていた。

自己紹介はお済みになりましたか？

おめでとございます！！皆さんは厳然な抽選から選ばれた方々です。皆さんには今からある選択をして頂きます。その選択が終了次第 ここから解放させて頂きます。ただ、時間内に選択するだけでいいのです

不自然なこの状況に似つかわしくない丁寧な言葉遣いの画面の文に私は少し違和感を覚えた。

（厳選な抽選？選択？なんの事だ？）

私の疑問は他の3人にもあったようだ。

「厳選な抽選の意味も時間内の選択も意味がわかんねーよ！！」

とすかさず高橋優一が叫ぶ。

（さすが若者。自分の状況が安全を確保できてないのにこの強気さ。本当に若いつてのは素晴らしい。）

高橋の言葉に反応するかのように画面はまた別の画像へと変わる。

では、高橋優一さんの質問にお答えして、さっそく高橋さんから始めて頂きましょう。百聞は何とやらといいますから

そう告げて2つの画面は突然1つ1つの画面に1人ずつの映像を映し出した。

写し出された画面の中の2人は鎖に繋がられ少し苦しそうな表情だ。

…と。

「真美まみ!!!太一たいち!!!」

高橋が画面に向かって叫んだ。すると、画面に写し出された2人がこちらを向き同時に

「兄貴!!!」

「ゆづちゃん!!!」

と高橋に向かって叫ぶ。

【LEVEL:1】1人目

「な…なんだよコレ…なんで真美と太一が??」

高橋は画面に映し出された2人を見て動揺しているようだ。

【さて、高橋優一さん。選択をお願いします。】

突然響き渡る全員が驚く…

「は???」

その声に答える高橋。

【画面に写るお2人のうち、どちらから大切な方をお選びください。
選ばれた方は生存。選ばれなかった方はその場で死んで頂きます。
制限時間は10分。10分経過しても選ばなかった場合は2人共に
死んで頂きます。】

声はそう言つと何も話さなくなった。

「な…にそれ…」

画面の向こうに写る高橋をゆうちゃんと呼んだ女が呟く。どつちら
向こうの部屋にもこちらの声が聞こえているようだ。

「なんだよそれ……！意味わかんねーだろ……！選べるわけねーだろっが……！」

興奮して吠える高橋。

【あと9分です。】

冷静な口調で話す声が響く。

「だから……！選べるわけないだろっが……！聞こえてんのか？」

高橋は姿は見えないその声に向かってキレる。

「ゆづちゃん……」

画面に写る女が涙を流してこちらを見つめている。

「兄貴……」

もう1つの画面に写る男の子は高橋の弟らしい。

「えらべれねーよ。婚約者と弟なんて……」

そう呟くと2つの画面に写し出された2人を見つめて立ち尽くす高橋。

【あと5分です。】

そんな高橋を無視して時を刻む声。

「兄貴…俺、いいから。真美さんを選んで。」

少し寂しげな声で高橋に告げる弟。

「なッ！！太一バカじゃねーのか！？俺がお前を見捨てれるわけないだろ！！」

弟に一喝する高橋。

「じゃあ、兄貴は真美さんを失ってもいいの？？真美さんのお腹の中には兄貴の子供もいるんだよ！？」

弟のその言葉に高橋は何も返せなくなっていた。

そんな高橋の変わりに

「私たちは太一くんを犠牲にしてまでこの子を育てたくないよ。」

涙を流しながら訴える高橋の婚約者の真美。

【あと2分です。お選び頂けない場合は2人共に死んでいただきます。】

無情にもそして事務的に時を刻む声。

「ふざけんな！……選択とか死ぬとか何なんだよ！……なんの権利があつてこんなことさせてんだよ！……！」

高橋は声ができる天井に配置されたスピーカーカーに向かって吠えた。

【残り1分です。】

「兄貴！……！」

「ゆづちゃん！……！」

画面の2人は蒼白の顔で高橋に訴えかける。

【LEVEL:1】代償

「俺の生まれ変わりだと思って幸せに育ててあげて。」

そう力ない弟の声を聞いた途端…

「真美を…」

高橋は婚約者の名前を呼んだ。

【真美さんで受け付けました！！おめでとございます。真美さんには優一さんと無事に帰宅して頂きます。残念ながら選ばれなかった太一さんにはこの場で死んで頂きます。】

「太一！！！！！」

「太一くん！！！！！」

画面の真美と高橋が太一を見つめる。

【なお、今回は選択に9分かかってますので、9分かけて死んで頂きます。】

そう声が告げたと同時に画面に写っている太一という少年は突然苦しみだした。

画面の太一という少年は9分間にわたりじわじわと死んでいった…。

画面から目を離す事が出来なかった私は、一部始終を目の当たりにしたのだが…

どうやら太一君が居た部屋に徐々に毒ガスが送られたようだった。

弟の苦しみもだえる姿に高橋は何度も呼びなれた弟の名前を呼び、時にはまたスピーカーに向かって吠え、泣きじゃくり、最後は…

「太一…ごめん。ごめんな。ごめん太一…」

と繰り返し呟いていた。

そして、毒ガスのせいで目が飛び出てそこらじゅうの毛穴から血を流し、外見が太一君だと確認できないくらいになった時…

とうとう太一君は動かなくなった。

高橋は呆然とその場に立ち画面に写る弟の変わり果てた姿を見つめていた。

私たちもその様子を呆然と見つめるしか出来なかった。

【お疲れ様でした。高橋優一さんは無事に選択を終了されましたので、ご帰宅願います。】

その声が告げると天井から何やら手みたいな物が降りてきて高橋を掴むとまた天井へと戻っていった。

高橋は弟の死を目の当たりにしたせいか、さっきまでの闘志はなく何も言わずに何もせず成すがままの状態で天井へと消えていった。

残された私は目の前で起きた突然の惨劇にただ震えるしか出来ずに立ち尽くしていた。

【LEVEL:1】2人目

「な…何よ今のは…」

沈黙を破ったのは鈴木栄子だった。

鈴木に目をやると…

ビツシヨリと汗をかきながら顔面蒼白状態で震えていた。

もう1人の田村和志も同じ状態だ。

自分たちが今、どんな状況に立たされているのか認識して初めて感じる

【死と恐怖】

(次は誰だ…俺は誰と誰で選択をさせられるんだ。)

そんな不安と恐怖を抱いていると2つの大きな画面が変わった。真美と呼ばれていた高橋の婚約者の姿は気付けば画面から消えていた。そして、新しく画面には子供が2人写しだされていた。

【お待ちせしました。田村和志さん。次は貴方の番です。ルールは一緒ですので説明はいりませんね???では選択してください。】

その声と共に田村が叫んだ。

「みの実……！ういで幸司……！！」

「パパ……！！」

画面に写し出された2人の子供は田村に向かってそう叫んだ。

「なんで……なんでなんだ……！！」

田村は画面に映る2人の姿を見て床を思いっきり殴りながら叫んだ。

「パパ……怖いよー」

「パパここはどこなの……？」

2人のか弱い声が部屋中に広がる。

「大丈夫だよ。パパがすぐに助けてあげるからな。」

田村は涙を流さずに子供たちの前で懸命に冷静さを保っているようだ。

ルール説明が省かれたのは幸いだった。

もしこのルール説明をこの子供たちが聞いていたら……。

そう思うと私も涙が流れそうになった。

【LEVEL:1】選べない

「なんで10歳と8歳の子供がこんな事に…なんで俺が…」

そう呟いて田村は画面に写る愛しい息子たちに目を向ける。

そうしていなければ幼い息子たちが不安になるからだろうと私は解釈していた。

【あと5分です。】

無情にもまたあの声がする。

「選ばれなかった方には死。どちらも選ばなかったら両方が死。」

そう何度も呟いて田村の顔はどんどん曇っていった。

「おい!!どちらも選ばずに俺が死ぬってのはないのか!!」

天井に向かってそう叫ぶ田村。

「パパ??」

画面に写る息子たちが不安そうに田村を呼ぶ。

【ダメです。それはルール違反です。】

声は田村の必死の意見もあっけなく却下する。

その田村の意見が却下され私は落胆した。

もし、自分が選択の番になったら自分をと私も考えていたからだっ
た。

そんな考えは甘かったと痛感していると…

「パパ…早くおうちに帰りたよー」

画面に写る子供のうち、少し小柄な方の子供が泣き出してしまった。

「実。大丈夫だよパパが助けしてくれるからね!!」

泣き出したのは弟の実君らしい。画面に写っている泣き出した弟を
慰めているのはお兄ちゃんの幸司君。

「お兄ちゃん…」

実君は幸司君の声で少し落ち着いたようだった。

そんな2人のやり取りを見ていると、日常から面倒見のいいお兄ち
やんの幸司君と

お兄ちゃんの後を付いて回る仲良しな2人の姿が目に見え

私は心臓をえぐられるような思いを感じた。

【あと2分です。】

幼い子供の命まで奪おうとする声。

「ちくしょー！！！！！！」

2人の姿を見ながら泣き叫ぶ田村。

選べるはずがない。親にとって子供とは順位をつけられるものじゃない。

兄だから、弟だから、と我慢させることはあるかもしれない。

でも、親にとって子供の存在価値は兄だからとか弟だからなんてもので比べれるものではない。どちらも平等に愛しているのだから……。

【あと1分です。】

無情にも最後の時を告げる声。

「選べない……」

田村はポツリとそしてどこか覚悟した声で呟く。

私はその言葉に驚きつい叫んでしまった。

「2人共失つていいんですか!？」

そしてその私の声のすぐ後に…

【時間切れです。田村和志さん、選択してもらえず残念です。では、息子さん2人共に死んで頂きます。…が、幼いお子さんを苦しめながら殺すのも私たちも気が引けますので…】

ビシャ!!!!!!!!!!!!!!

画面から嫌な音がした。

田村はワナワナと体を震わせて立っている。

「ぎゃ—————!!」

鈴木が叫ぶ。

私は田村から画面へと目をうつした。

「うっ。」

思わず私は口を塞いだ。

【LEVEL:1】3人目

高橋、田村と姿を消していき、この【選択】のルールを理解し、そしてこの【選択】のルールからは逃れられないことを痛感して私は、

(自分の番が永遠に来なければいいのに…)

と思っていた。

そして次に呼ばれる名前を待った…。

【お待たせしました。】

ゴクリ…。

声に反応して、私と鈴木栄子の唾を飲む音が異様に大きくゆっくり聞こえる。

【鈴木栄子さん。では、選択をお願いします。なお、このお2人にはルール説明も相手が貴方とどういうご関係かは説明しております。

】

そして2つの画面には2人の男が…。

しかし、片方の男の様子が今までと少し違っていた。

「栄子！！貴様よくも裏切ってくれたな！！まさか青木なんかと浮気してやがったなんて！！」

物凄い形相で鈴木に向かって罵声を吐く男はどうやら鈴木 of 旦那が恋人らしい。年齢からして旦那であろうと私は思った。

「宏……」

そんな旦那の言葉を無視して鈴木は旦那とは別の男性を見つめている。

「栄子さん……ルールは聞いたよ。やっとコレで2人で幸せになれるね。今までずっと我慢してきたのが今、報われるんだ！！」

宏と呼ばれるその男はウツトリした表情で鈴木に話し掛ける。

「ふざけるな！！栄子！！誰のおかげでここまで裕福な暮らしが出来たと思ってるんだ！！どうせ青木も金と社長という椅子を狙ってるだけだぞ！！お前みたいな女は用が済んだらすぐに捨てられるんだ！！」

鈴木と宏の2人の世界を旦那は邪魔するかのように罵声を続ける。

「うるさいわね！！もう、うんざりよ！！そうやって貴方はすぐに私をけなして金だ金だ。世の中金があればなんだって出来るって毎日のように言っては色んな人を裏切ってきて……私はもう我慢できないの……！！」

そう言っつて鈴木はまた宏と呼ばれる男を見つめてこう言った。

「青木さんは貴方とは違うの。いつも私のことばかり心配してくれて、いつも優しく情熱的で素敵な人なのよ。悩むことなんてないわ！！私は宏さんを選びます！！！」

そう鈴木は叫んだ。

【宏さんで受け付けました！！おめでとございます。宏さんには鈴木栄子さんと無事に帰宅して頂きます。残念ながら選ばれなかった茂雄さんにはこの場で死んで頂きます。】

淡々と答える声。

【LEVEL:1】狂った人間

「なっつっ!!ふざけるな!!俺を誰だと思ってる!!!」

画面に写る鈴木 of 旦那は酷く汗をかきはじめた。

「ねえ!!私、選択時間短かったでしょ??でも、殺すのはじっくりいってくれないかしら??この人には苦しませてばかりだったんだもの。最後まで逆には逆に苦しんでもらわなきゃ…」

そうスピーカーに向かって叫ぶ鈴木 of 顔は先に天井へと消えていった高橋や田村とは違って、とても清々しく笑ってこの状況を楽しんでいるようだった。

「何言ってるんだ栄子!!ふ…ふざけるな!!」

鈴木 of 旦那の顔は蒼白となり怒鳴る声にもどこか覇気がなくなっている。

もうすぐ自分は確実に殺されるのだと認識したからだろう…。

【かしまりました。鈴木栄子さんの見事な選択力に我々も感激致しましたので、茂雄さんには10分間じっくりと苦しみを味わって死んで頂きましょう!!】

今まで以上に明るい話し方をする声。

そして高橋の弟が死んでいった時のように

鈴木 of 旦那もゆっくりと苦しみもがきだし、

さっきまでの威勢の良さは徐々になくなり、

さっきまでの傲慢な言葉は一切吐かなくなり、

どンドン醜い姿となり動かなくなってしまった。

その姿を見て異様なほどの笑顔でずっと笑っている鈴木と宏と呼ばれる男性。

（狂ってる。狂ってるよこいつらも、そしてこの【選択】をさせている奴も）

私は2人の笑い声を聞きながら気が遠くなりそうだった…

【LEVEL:1】4人目

そして【選択】を終えた鈴木は最後に

「お似合いの死に様よ…」

と吐いて笑いながら天井へと消えていった。

辺りは静まり返り、さつきまで狭く感じていた部屋が急に広く感じ
てきて私は身震いをした。

そして最後になった私に課せられる【選択】を待った。

【お待たせしました。市村誠二さん。選択をお願いします。】

さつきの鈴木を選択が早く済み、機嫌がいいのか声は先ほどまでと
は違い少し明るく聞こえた。それが私にはとても不愉快でたまらな
かった。

そして…

2つの画面に映し出されたのは…

「慶子!!!舞!!!」

私は画面に写った妻の慶子と娘の舞に向かって叫んだ。

【なお、奥様にはルールは説明してありますので。】

淡々と説明する声。

「パパ！！！！パパ怖いよー」

泣きながら私に助けを求める愛娘の舞。

「大丈夫だよ。舞…泣いたりしたらダメだ。ママもすぐそばにいるからね。」

すぐ目の前に居るのに、抱きしめてあげることの出来ない状況に苛立ちながらも、娘を安心させるために笑顔で私はそう答えた。

「アナタ…」

元気の無い声で私を呼ぶ最愛の妻、慶子。

「大丈夫だ。心配ない。」

そう言いながら私の声が震える。

震える私の声で妻は悟ったのか

「いいの。舞を選んで。」

そう呟く慶子。

「ダメだ…そんなのダメだ。慶子を失うなんて…。」

私は涙を我慢して慶子に答えた。

「ダメよ。舞はまだ4歳よ。私たちの宝物よ。舞を失ってまで私は生きてくは無いわ。」

慶子の言葉に私は黙る。

「いいの。舞が、アナタが幸せに生きてくれたら私は。恨んだりしないわ。アナタの選択は間違っってなんか無いのよ。」

寂しそうに、でもどこか覚悟の決まっている強い口調で言う慶子。

（ダメだ。ダメなんだ。慶子も舞も俺には大切な家族なんだ。2人共に愛しているんだ。なんで俺が死ぬって選択はないんだ。）

妻の言葉に私は何も言い返せずただこの状況をどうしたら切り抜けるか必死に考えていると…

【あと5分です。】

死の時を刻む声。

（悩めば悩むほど時は経ちそしてその時は死に逝く時間と比例する。悩んだ分だけ選べなかった方の死は苦しんで死んでいく事に…。でも、選ぶことができない。慶子も舞も愛してるんだ…）

悩んで黙っている私に聞こえてくる悲痛な声。

「パパー怖いよーママに会いたいよー」

舞が泣いている…。

まだ4歳の幼い我が子。母親を失ったらどんなに悲しむだろうか。そして母親を失った原因が父親だと知ったらこの子は…

その声に妻の慶子は

「舞。大丈夫よすぐにうちに帰れるからね！！帰ったらママとパパと舞の大好きなシャボン玉飛ばそうね！！」

慶子の声で安心したのか娘の舞は泣き止み

「本当に???絶対だよ!?舞ねーいっぱい飛ばすんだー」

と返事をして歌を歌いだした。

シャボン玉飛んだー

屋根まで飛んだー

屋根まで飛んでー

壊れて消えた

妻の慶子も一緒になって歌いだす。

私はそんな2人を見つめながら涙が止まらなかった。

「なんで…こんな事に…」

【あと2分です。】

私はその言葉を聞いて覚悟を決めた。

【LEVEL:1】運命の時

シャボン玉の歌を歌いつづける最愛の妻と最愛の娘。

2人の声と2人の姿を目に焼きつけて

私は…

「すまない慶子…。娘の舞を選びます。」

呟く様に告げた。

「いいの。あなた。舞をお願いね。必ず幸せにしてね。私はあなたと知り合ってから本当に幸せだった。舞とあなたと過ごせて毎日が幸せだった。決して自分を責めたりしないでね。あなたは何も悪くないわ。」

そう言う慶子の顔が涙でグシャグシャになっていく…。

【舞さんで受け付けました！！ おめでとございます。舞さんには市村誠二さんと無事に帰宅して頂きます。残念ながら選ばれなかった慶子さんにはこの場で死んで頂きます。】

妻が死ぬのが当たり前かのように話す声。

「なんなんだお前は！！！！」

私は姿の見えない声に向かって叫んだ。

【選択したのはアナタです。今回は娘さんには残酷すぎるので娘さんの画面はシャボン玉の歌の歌詞でも流しておきましょう。では…】

そう声が途切れると、慶子は苦しみだした。

私が8分間も悩んだせいで慶子は8分もの間、毒ガスに苦しみもだえて死んでいつてしまった。

毎日綺麗に整えていた髪の毛も、

そんなに濃くはないがキツチリとしたメイクも

グチャグチャになり娘に優しく良き母

良き妻だった美しい慶子はそこにはいなかった。

何も知らない舞が画面の向こうでシャボン玉の歌を歌っている…

その声を聞きながら私は慶子との思い出を走馬灯のように思い出していた。

（いつも笑っていた慶子。いつも優しくかった慶子。舞がお腹に宿ったとき、30歳をお互いに過ぎてたから跳ね上がったって喜んだな…。舞のためならいつでも死ねるって何度も言っていたな。その度に慶子がいなくなったら俺が困るって答えてたな。すまない。慶子…）

そして天井から手が伸びてきて私を天井へと…

【LEVEL:1】記憶

「パパ!!みてみて!!」

「凄いな。あ。舞はママよりも上手にシャボン玉を吹くな。あ。」

舞はそんな私の言葉を無視して、シャボン玉を次々と青く澄み切った空へと吹いていた。

その姿を見て私は舞にバレないように下を向いたまま

「舞はこんなにも大きくなったよ。慶子…。」

と涙声で呟いた。。。。

「ありがとう。これでいいのよ。あなた…」

そう慶子の声が聞こえた気がしたのは、私の勝手な想いから作り出された幻聴だったのかもしれない。

舞は自分が作り出したシャボン玉に満足しているのか、空に浮かぶシャボン玉に見とれている。

俺もそのシャボン玉を見つめる…

大きなシャボン玉は

ユラユラと

クルクルと

ゆっくり回りながら空高く上がっていく。

そして

虹色のシャボン玉は青空の中で弾けた。

その瞬間…

あの日の光景が蘇る。。

暗く狭い部屋。

倒れている3人の人。

暑苦しい空気。

耳障りな換気扇の音。

目の前の大きな2つの画面。

死の時を刻む声。

あの日、なぜ私はあそこに居たのか。

あの日、なぜ私はあんな事に巻き込まれたのか。

あの日…なぜ私は慶子を失ったのだろうか。

理由は今だに分からない。

また誰かがあの部屋で究極の死の選択をさせられているのかも知れ

ないと思った時

私は…

【LEVEL:2】始まり

シャボン玉

消えた

飛ばずに消えた

生まれてすぐに

壊れて消えた

幼き頃の自分の歌声が聞こえてくる。

横に立っているのは優しく微笑む父…

懐かしい光景と懐かしい歌の夢に見ながら私は目を覚ました。

目を覚まして気付く

私はいつの間にか知らない部屋に寝かせられていたようだ。

【部屋】

というのは似つかわしくもないかも知れない。

コンクリート剥き出しでドアも窓もない

【空間】

唯一の空調は古びたいくつかの換気扇。

カタカタカタカタカタカタ

と音を鳴らしながらも今にも壊れて止まってしまいそうな感じた。

(私は何故ここに居るのだろうか?)

(そして横に同じように立ち尽くすこの人達は誰なのだろうか?)

その【空間】には自分の他に3人の人間が居た。

私が目を覚ました時にはこの3人はすでに目を覚ましている状況だった。

若い男性が1人。

服装からして遊びに行ってきたままの感じだ。

他には…

綿日和年上であろう女性が1人。

なんだか動きやすい部屋着みたいな服装。

そして…

私の隣でさっきからガタガタと震えながら泣いている…女の子が1人。

「だ…大丈夫??」

ずっと座り込んで泣いているその少女に私が声をかけた時だった。

目の前の壁に備え付けられていた2つの画面が突然明るく光りだした。

そして、その画面にはこう書かれていた…

【LEVEL:2】A・B・C・D

おはようございます

小池 拓真さん(こいけ たくま) 25歳。

杉浦 春菜さん(すぎうら はるな) 27歳。

桜井 葵さん(さくらい あおい) 15歳。

望月 美咲さん(もちづき みさき) 19歳。

気分はいかがですか？突然のことで驚かれたでしょう？しかし安心下さい。何も、皆さんをとって食おうなどという事はございません。

その画面を見て私はまた他の3人を見る。

(あの男性が小池さん。その横が杉浦さん??で、この子が桜井さん??ってか…中学生だったんだ…。)

私が桜井という泣いている中学生の少女に寄り添いながらそう思っている…

「な…なんですか…コレ…わたし…私、早く帰らないと、い…いけないんですけど…」

動揺してどもりながら話す杉浦。

「何でここに俺たちを呼んだんだよ!!」

唯一の男性である小池が叫ぶ。

その小池の声に反応するように画面の文字が変わった。

おめでとつございます!! 皆さんは厳然な抽選から選ばれた方々です。皆さんには今からある選択をして頂きます。その選択が終了次第ここから解放させて頂きます。ただ、時間内に選択するだけでいいのです

「は???」

小池は更に意味の分からない文面に苛立った様子だった。

(抽選…??にしてみれば、この空間やこの画面の違和感。それに…私は何かに応募をした記憶も無い。なんの話なんだろう???)

私がそんな事を思っていると

「ちょ…マジ意味分かんねーし!選ばれたとかいいから帰らせるよ!!」

小池は更に怒った口調で叫ぶ。

では、小池拓真さんから始めて頂きましょう。選択を済まして頂ければ無事に帰宅できますので。まずはA・B・C・Dの中から選

扱してください。

画面はそこで止まった。

「何だよそれ??こっちの意見は無視かよ??」

小池が何を言っても画面は動こうとはしない。

「と…とりあ…あえず、選んでんみたらどうですか??それで帰れるんですし…」

そう言ったのは今だに動揺を続ける杉浦だった。

「チツ…じゃあーBで!」

小池は杉浦の助言を聞き入れながらも苛立った声でそう言い放った。

私はそんな小池を見つめながら画面に映し出されている文字の

【まずは】

の言葉が気になって仕方が無かった…

【LEVEL:2】1人目

Bで受け付け致しました。

2つの内の1つの画面は小池の選択したBの文字を映し出す。

その文字を見つめて呆然となる私たち。

そんな私たちを他所に…

【では、小池拓真さん。選択をお願いします。】

突然、響き渡る声。

「は???また???」

小池は意外な展開に驚いている。

そして2つの画面は更に変わっていく…

1つ1つの画面に1人ずつ映し出される…

その画面に切り替わった途端…

「ばあちゃん!!!!!!!!!!」

小池が叫ぶ。

その小池の声に反応して画面に映し出されている老婆がこちらを向く。

それと同様に、もう1つの画面に写っている女性もこちらを向いた。

「拓ちゃん…」

老婆は弱々しい声で小池を愛称で呼ぶ。もう1人の女性は酷く顔を歪ませたまま黙って小池を見つめている。

そして一時が過ぎると…

【画面に写るお2人のうち、どちらから大切な方をお選びください。選ばれた方は生存。選ばれなかった方はその場で死んで頂きます。制限時間は10分。10分経過しても選ばなかった場合は2人共に死んで頂きます。】

そう説明を終えると声は何も言わなくなった。

「な…なんだよこれは！！ばあちゃん！！！！」

小池は必死に画面に向かって叫ぶ。

…が声は何も答えない。その代わりに言葉を発したのは小池の祖母ではない方の女性だった。

「た…拓…」

その声を聞いた途端に小池の顔色が変わる。

「な…なんでアンタが…」

小池はさっきよりも動揺した様子で女性を見つめる。

「その声…まさか…礼子かい??」

小池の祖母にも声が届いているのか動揺しながらそう言った。

「なんで…か…母さんが…」

小池がそう呟いた時だった。

【残り8分です。】

あの声が聞こえた。

「ちょ…意味わかんねーよ!!なんで、ばあちゃんと母親の命の選択を俺がしなきゃなんねーんだよ!!Bの選択はなんだよ!!」

小池は大声で姿なき声に怒鳴る。

そんな小池に…

「拓ちゃん。礼子を選びなさい。私はもう十分人生を送ってきたから…」

と呟く祖母。

そんな祖母に小池は…

「嫌だ！！俺を捨てた人間なんか助けたくない！！俺は…ばあちゃんに育てられてきたんだ！！」

下を向いたままそう叫ぶ小池。

【残り5分です。】

またあの声がある。

制限時間10分。

半分を切った…

「拓…ごめんね。今までごめんね。」

制限時間が間際になり、小池の母親は自分は選ばれないと覚悟してか小池に向かって泣きながらそう告げる。

「今さら…何、言ってるんだよ…」

母親の言葉に言葉が震える小池。

【残り3分です。】

淡々と時を刻む声。

【LEVEL:2】答え

その声に反応して小池は…

「ばあちゃんがどれだけ苦労したか知ってるのかよ…俺がどれだけ辛かったかアンタに分かるのかよ！」

母親に向かってそう叫ぶ小池。

その小池の言葉に…

「拓ちゃん！！礼子を恨んではダメだっていつてるでしょ！？ばあちゃんはいいの…拓ちゃんとたくさんの幸せな日々を送ってきたから。最後に…礼子の声も聞けたし、もう思い残す事はないよ。」

小池を一喝してから説得するように話す小池の祖母。

「でも…。」

なかなか答えを出せない小池。

【残り1分です。】

時が迫る。

「ばあちゃん…知ってるんだよ。拓ちゃんがこの10年間。休みの日に礼子の事を探していたのを…。ばあちゃんの最後の頼みだ…礼

子と…お母さんと仲良く暮らしておくね。」

その言葉に小池は…

「母さんを選びます。」

と告げてその場に崩れた。

【礼子さんで受け付けました！！おめでとございます。礼子さんには拓真さんと無事に帰宅して頂きます。残念ながら選ばれなかった菊さんにはこの場で死んで頂きます。なお、死に方は先ほど拓真さんがお選びになったBの火あぶりです。今回、選択に9分かかっていますので9分かけて死んで頂きます。】

その声に反応して下を向いて崩れていた小池が祖母の映し出されている画面を見た時だった…

画面に写っていた老婆は足のほうからゆっくりと燃えていく…

「あ…あつい…あつい…」

小池の大好きだった祖母の悲痛な叫び声が響く。

「ばあちゃん！…！」

「お母さん！…！」

小池と小池の母親の呼ぶ声にも反応できないくらい小池の祖母はあつという間に火だるまになり…

画面は真っ赤な姿で

右や左にうごめく

元は人間なのかも分からない小池の祖母を映し出す…

そして最後は…

動かなくなり溶けたような焦げたような物体だけが写っていた。

「ばあちゃん…ばあちゃん…俺…」

室内にはただ泣きじゃくる小池の声だけが響いていた。

そして天井から伸びてきた手が小池を連れ去り、

残された私たちはただ、その様子を呆然と見つめることしか出来な
いままでいた…

【LEVEL:2】2人目

【いやああああああああ!!!!!】

小池がいなくなり静まり返った室内に突然響く叫び声。

声の主は先ほどから私の横で泣いている15歳の少女。

目の前で今まさに起きた

【突然の惨劇】

は私でさえ震えて冷や汗を流す状態だというのが...

15歳のこの少女には耐え切れない事だろう...

「大丈夫だから...」

私は自分にも言い聞かせるように桜井という少女に声をかけ震える体を抱きしめる。

「か...帰りたい...おかあさん...帰りたいよお。」

一点を見つめブツブツと呟く桜井。

そんな私たちをあの声がまた襲う。

【お待たせしました。杉浦春菜さん。次は貴方の番です。ルールは一緒ですので説明はいりませんね??では、まずはA・C・Dから選択して下さい。】

その声を聞いて杉浦に目をやると…

「わ…わわわわ…」

と今まで以上に動揺して話すことが上手く出来ていない。

「わ…わわわ私は…Aで…」

どうにか答える杉浦。

Aで受け付け致しました。

画面に映し出されるAという文字。

(小池が選んだBは火あぶりだった…では他は??)

私がそんな事を考えていると…

「しよ…翔…涼太…」

呟く杉浦。

【旦那様にはルール説明は済んでおります。では、選択して下さい。】

また声が響き渡る。

そして、画面に映し出されたのは小さな男の子と男性。

男の子は顔中青アザだらけで怯えている。

男性はこちらを…

いや…

杉浦を睨みつけてはいるものの、落ち着いている様子に見える。

「分かってんだろっな??春菜…」

男性は更に鋭く杉浦を睨む。

その言葉に今まで以上に動揺し震えている杉浦。

この会話のやり取りで、普段の杉浦と旦那の関係性を物語る…。

「で…でででも…涼太はま…ままままだ3歳…」

画面を見ることなく震えながら答える杉浦。

「てめえー!!俺より前の男との子供を取る気かよ!!??」

突然、怒鳴りだす杉浦の夫。

その声に体をビクつかせ更に震える杉浦。

【残り7分です。】

時が過ぎる…

【LEVEL:2】歪んだ愛

「春菜！！早くしろや！！バカじゃねーのか！？」

時を刻む声に焦りだしたのか冷静さを失っていく杉浦の夫。

「マ…ママを怒らないで…。」

か弱く届く声。

自分の中の恐怖よりも怒鳴られている母親を心配し庇う小さき命。

(なんで迷うの??なんで子供を選べないの??我が子でしょ??)

私は杉浦を見つめて苛ついていた。

(どう見ても、あの子の顔のアザは最近のものではない。あの夫が暴力を振っているのだろっ…杉浦もよく見れば顔にアザがある…。なんでこんな男の命と我が子の命で迷うの??)

そう思っていると…

【残り4分です。】

苛ついている私を更に苛つかせる声。

「なんでこんな事をさせるのよ!!???」

完全に身勝手に非常識なこの

【選択】

をさせている声に向かって私は叫ぶ。

だが、声は答える事はなく変わりに…

【残り3分です。】

と告げる。

「わ…わわわわわ私は…ずっと貴方の愛情が欲しくて、貴方に愛されたくて、例え貴方が私や涼太に暴力を振るっても我慢してきた…」

突然話し出す杉浦。

「俺をここで選べば、またちゃんと愛してやるよ…!」

吐き捨てるように答える杉浦の夫。

「あ…ああ愛してくれるの??」

泣きながら画面を見つめる杉浦。

(なぜ…??なぜ、自分のことばかり考えて子供の事は考えないの？血が繋がってないから？男としての愛情を子供はくれないから？なんて自分勝手なの??)

私は杉浦たちのやり取りに耳を塞ぎたくなつた。

【残り1分です。】

時が迫つた。

「マ…ママ…ありがとう。大好きだよ。」

そう言つて微笑む杉浦の息子。

私はそんな杉浦の息子が不憫でたまらなくなり、耳を塞ぎ目を閉じて杉浦の出す答えを遮断した。

目の前で今から起きるであろう惨劇を頭に浮かべながら私はそのまま

【事】

が過ぎるのを待った。

「ぎゃあああああああああ…!」

「てめえーええええええええええ…」

「は…はははははは…るるるる…」

耳を塞いでいても聞こえてくる悲痛な男の叫びに、私は恐る恐る目を開けると画面を見つめながら微動だにしない杉浦と…画面に写る全身から煙を出して痙攣を起こしている杉浦の夫らしき姿を捉えた。

（息子さんを選んだ??）

そう思っていると

プスプス

バチバチ

と音を立てて杉浦の夫らしき物体は全く動かなくなった。

「愛して欲しかったの。私も…涼太の事も…。私が弱いから…」

そう言い残して杉浦は大きな手によって室内から姿を消した。

【LEVEL:2】3人目

「嫌あああああ!!」

「助けて!!嫌だよ!!嫌だあああ!!」

杉浦が姿を消し、私と2人きりになってしまった桜井は錯乱状態に陥って室内を走り回り出口を探す素振りで壁を叩いて回る。

そんな桜井を気遣う余裕は私にはもう残ってはいなかった…

(次は…順番で言えばきつと桜井さんの番だろう…私は…最後に名前が表示されていた。きつと私は最後…)

そう思いながら私は更に

(この【選択】は何をさせたいの??なぜ、わざわざ大事な人との命の選択をさせるの??)

【愛情】と【死】の選択をさせる意味は??選択者の死という選択はないの??選べない場合はどうしたらいいの??)

疑問や怒りが私の頭を支配する中、

【お待たせしました。桜井 葵さん。次は貴方の番です。では、まずC・Dから選択して下さい。】

桜井の番がきた…。

桜井に視線を向けると声に反応して室内の後方で立ち尽くして画面を見つめている。

「嫌!! 帰らせて!! 嫌ああああ!!」

泣きじゃくる桜井。

【選択して頂ければ無事にお帰し致します。】

淡々と答える声。

選択される側に容赦なく3歳の子供を選んでいる時点で15歳の少女の想いなど考えているはずは無い…。

「嫌ああああ!!」

泣き叫び選択をしない桜井に痺れを切らした声がこつ告げる…。

【では、こちらで決めさせていただきます。桜井さんは…】

そう言って画面にはCの文字が表示される。

(C…桜井はC。私は最後に残ったD…。)

そんな事を思っていると、画面には桜井が選択しなければならぬ

人物2人が写し出された。

【2人にはルール説明は済んでおります。では、選択して下さい。】

その声と同時に画面に写る2人が桜井に向かって叫ぶ。

「なんなのよコレ!!なんでアタのせいで私がこんな事に巻き込まれなきゃいけないわけ??」

1人は桜井に対して酷く怒っている少女。桜井と同世代のようだ。

「どついう事なんだ桜井?お前の仕業なのか??」

もう1人は冷静に見せる口調の割にも顔が引きつっている男性。

そんな画面に写る2人を見て…

「せ…先生。ま…松井さん。」

震えて立ち尽くしたままそう呟く桜井。

「なんでこの2人なの!?!なんでよ!?!??」

突然そう叫んだかと思うと桜井は壁に顔を向け画面から顔をそむけて座り込んでしまった。

【なぜ迷うのです??この2人に貴方は酷いことをされてきたでし

よう？？我々は苦しみから解放して差し上げようと思っ
てご招待したのですよ？】

突然、語りかけてくる声。

「苦しみから解放？？」

そう呟いて突然立ち上がる桜井。

【LEVEL:2】醜態

「ちょっと!!!まさか…さっきの説明は本気なわけ??」

こちらの様子の異変に気付き、松井と呼ばれる少女が問い掛ける。

【現実のことです。先ほどご説明したとおりです。桜井さんを名前が同じで苗字も似ているから気に食わないという理由でイジメ続けてきた松井葵さん。

そしてそのイジメを黙認しつつ、桜井さんのSOSに気付かないフリをしてきた担任の安西大介さん。

あなた方お2人の命は桜井さんに託されております。】

そう言って声は何も言わなくなった。

画面に写る2人の顔色が青くなっていく…

「桜井!!!すまなかった!!!助けようとは思っていたんだ!!!でも、俺にも立場があつてな!?!分かつてくれるだろ??」

立ち尽くしたまま下を向く桜井に必死に弁解をする安西。

「ちょ…ちょっと!!!先生なんなのそれ!?!私は死んでもいいわけ?サイテーッ!!!」

安西の弁解に焦る松井。

「葵…私、ごめんね。私が悪かったよ。本当に反省してる。もう二度としない。だから…許して??」

安西に負けじと謝罪する松井。

(醜い…)

命がかかっているのに私は遂、そんな事を思ってしまった。

そんな2人の言葉に何も返さない桜井。

【残り3分です。】

選択時間が迫る。

(この選択の意図は??自分にとってマイナスにしかない2人を普通なら選択しないで2人とも見放すはず…)

桜井に課せられた選択に疑問を抱いていると…

「本当に??本当に悪かったと思ってる??」

眩く様に聞く桜井。

「本当よ!?!」

「俺もだ!!」

必死に答える松井と安西。

その答えに…

「2人が本当に反省しているなら…2人は生かして私が死にます。私はイジメられていたけど、見放されていたけど、だからって私が2人の命をどうこうするのは…間違ってる。私は、こんな事を望んでたんじゃない!!」

天井に向かって叫ぶ桜井。

【ダメです。ルールは変えられません。どちらから選ぶか、どちらも選ばずに2人共に死んで頂くかのどちらかです。】

桜井の叫びに答える声。

「なっ!?!」

「なんでよ!?!本人がそれでいいって言うてんだからいいじゃない!」

驚きを隠せない松井と安西。

【残り1分です。】

時間切れが迫る…。

「桜井!!」

「葵!! 助けて!!」

切迫の表情の松井と安西。

そんな2人を見て桜井は…

「嫌ああああああああ!!」

と叫んで画面に背を向けて座り込む。

【時間切れです…。桜井さんにご選択して頂けませんでしたので、2人共に死んで頂きます。なお、死に方は先ほどお選びになったCの首切りとなります。今回、選択に10分かかっていますので10分かけて死んで頂きます。】

そして声が途切れたのと同時に画面の2人は苦しみます。

首に巻かれた鎖は2人の首をジワジワと締め付けだしている…

「ち…ちくち…ち」

「あ…お…なん…で…」

締め付けられる鎖の力に松井も安西も話すことが出来ない。

鎖の力で圧迫され真っ赤に染まる2人の顔。

そして

2人は10分かけてジワジワと鎖を締め付けられ最後には…

蒼白の顔と真っ赤な血によって染めあげられた顔は胴体と切断された…

その瞬間

「あははははははは。」

突然…笑い出す桜井。

「ばっかじゃないの！？私がどんだけ苦しんできたと思ってるの！？醜いのよ！！自分のしてきた事を棚にあげて、あんな言葉で許されるんでも思ってるの??？」

先ほどまでの震えて泣いていた桜井はどこにもいない…

「私の演技に騙されて必死に謝罪して、命乞いして、超ウケル！！
バカよ…本当にバカ…ば…」

そう言いながら桜井の目から涙が流れていた。

桜井は泣き叫びながら天井から出てきた手によって消えていった…

【LEVEL:2】4人目

桜井の笑い声と泣き声が頭から離れない…

(桜井さん…本当は演技じゃなかったんだろうな…)

そう思いながら1人残された私は画面に釘付けになって時を待った。

(私に課されるのは?)

そう思っている私に…

【お待たせしました。望月 美咲さん。貴方の番です。最後の…】

その声は途切れ、画面にはDという文字が表示される。

【では、選択して下さい。】

その声と共に画面に映し出された人物を見て私は思わず叫んだ…

「お父さん!!^お歩!!^あ」

私の声に2人は不安そうに私を見つめて…

「美咲…」

「みい…」

と私の呼びなれた名前で呼ぶ…。

「なんで??なんでお父さんと歩なの??」

父親と彼氏との選択に動揺を隠せない私。

そんな私に…

「説明は受けた。彼氏を選びなさい。美咲…お前は俺が嫌いなんだから、迷う必要はないだろう??」

諦めにも聞こえる覚悟を決めた口調で告げる父親。

「みい…ダメだ。ちゃんと考えるんだ!!! 3人が助かる策があるはずだ!!!」

必死の表情で叫ぶ歩。

19年間…

育ててくれた父親。

1年間…

付き合ってきた彼氏。

(確かに、私は父親が嫌いだ。厳格で亭主関白でお母さんが苦勞し

て泣いているのを何回も見てきた。でも、母親を1人にも出来なくて家から出る事も無く、父親を避けるように過ごしてきた。まともな父親の顔を見るのもどれくらいぶりだろう…)

【残り6分です。】

カウントダウンの声に私は物思いに耽っている場合じゃない事に気付く。

(自分は死ねない。悩んだ分だけ苦しみが…)

自分よりも前に選択を終えて行った人間たちの情景が頭をよぎる…

(歩…お父さん…)

覚悟を決めようとした時だった…

「みい…ダメだよ??お父さんは、みいにこの世の生をもたらしてくれた人だよ??」

私の気持ちに気付きそう告げる歩。

「あゆ…」

「いいんだ!!俺は家族に酷い事してきたんだ!!美咲にとって決断していい父親じゃなかった!!だから、最後まで、美咲のために…」

私の言葉をさえぎってそう叫ぶ父…。

【残り3分です。】

迫り来る死の時を刻む声。

「美咲…俺はお前にとっても母さんにとってもいい父親ではなかった…。でも、俺は、母さんの事も美咲の事も本当に愛していたよ…美咲の成人式…結婚式…見たかったよ。。。。」

覚悟を決めた父の声。

【残り1分です。】

響き渡る死の声

【LEVEL:2】強さ

「みい…」

歩の音がする…

「幸せになるんだ。俺はお前に嫌われていたが、俺は愛していたよ…」

父の力なき声が胸に突き刺さる…。

「あ…歩を…選びます。」

私はそう呟いた…。

【歩さんで受け付けました！！おめでとございます。歩さんには美咲さんと無事に帰宅して頂きます。残念ながら選ばれなかった浩さんにはこの場で死んで頂きます。なお、Dの水没で死んで頂きます。今回、選択に9分かかっていますので9分かけて死んで頂きます。】

「お父さん！！」

叫ぶ私。

「幸せになるんだ。必ず幸せに！！愛していたと母さんに…伝えてくれ。」

微笑みながら話す父。

自分の死を受け止めて微笑む父の姿。

「美咲の幸せのために死ねるならいいんだ。」

そう告げる父の目から涙が流れている。

娘のために…

覚悟を決めた父の強さ…

父の愛情…

そんな父の腰辺りにまで水が達しているのに気付いた私は…

「お父さん！！私も大好きだったよ！！素直になれなくてごめんなさい。寂しかったただけなの！！嫌いなんかじゃなかったよ！！」

必死に父に自分の気持ちを伝える。

「分かってる。分かってるから…大丈夫だ。」

そう言って微笑む父。

そして…

水はとうとう父の首まで届いていく…

「幸せになるから！…ごめんなさい…ごめんなさい…」

画面に写る優しく微笑む父…

「あ…あい…し…」

父親の必死の抵抗も空しく、水はとうとう父親の頭上にまで達した。

苦しみもがく父親…

鎖に繋がれ逃げることの出来ない父は…

画面いっぱいになった水の中で動かなくなり体が浮き始めていた…

幼い頃、肩車をしてくれた優しい父との思い出が頭を支配していく…

「嫌あああああああああ！！！」

泣き叫ぶ私に前の3人同様に手が伸びてきて私を掴み天井へと運ぶ。

【LEVEL:2】声

「みい…」

父親の墓に手を合わせている私に背後から歩が声をかける。

「ん??？」

私は振り向き立ち上がると歩の手を握った。

「これからどうする??？」

少し不安気な表情の歩の言葉への私の答え

「探し出す…」

私は歩の手を強く握ったまま父の墓に体を向けて言い放った。

あの日…

私が天井から伸びてきた手に捕まり腕にチクリと痛みを感じた後、
すぐに眠気が襲ってきた…

徐々に遠のいていく意識の中で聞こえた

【声】

それは

【2回目は…いまいちでしたかね？？どうしますか？？3回目は？？】

【でも3回目は…】

という声だった。

聞き慣れたくはない、でも今でもハッキリ覚えている死をカウント
ダウンする声。

そしてその後…

【所詮、人間の愛などこんなものだ…】

という聞いたことの無い別の人間の声。

「2回目。そして3回目と言っていた。私たち以外にも被害者がいる。私たちの他にも居るはずよ…仇を取るために動いている人が必

ず…私だってお父さんの仇を…」

そう步に告げて私は父の墓を見つめる…。

「失礼します。ご報告させて頂きます。」

黒スーツの男が書類を持ってたくさんモニターが付けられて部屋へと入ってきた。

「3回目のメンバーが決まったのかね??」

モニターに映るうちの1人が黒スーツに質問を投げる。

「いえ。実は…少々問題が起きてまして…」

少しひかえ気味に話す黒スーツ。

「問題??なんだね??そっちで処理できないのかね??」

モニターに映る先程とは別の1人が問い掛ける。

「いえ、処理は出来ませんが3回目にあたって検討して頂きたい…」

そう言つて黒スーツは持っていた書類をモニターに写る人物全員に見えるように開く…

そこには…

【LEVEL：1】参加者：市村 誠司 知人1名

【LEVEL：2】参加者：望月 美咲 恋人1名

による不適切な行動に伴う【LEVEL：3】への提案。

と書かれた文章が…

【LEVEL:3】現実 過去

歌が聞こえる…

懐かしい声。

でも今にも消え入りそうな…

悲しい声。

(けい…こ???)

そう思っつて私は顔の見えない声の主に手を伸ばした。

その瞬間、指先に触れた冷たい感覚に違和感を感じ目を覚ます。

開いた瞳に飛び込んできた情景。

それは…

見た事のある壁と床。

耳に付くあの換気扇の音。

その情景と音に驚き私はその場に飛び起きた。

「じじは…」

そう呟いて私は目の前に広がる

【空間】

に立ち尽くす。

出口の無い部屋

壁に掲げられた大きな2つの画面

そして、まだ目を覚まさない3人の男女。。。

「これも…まだ…夢…なのか??」

そう呟いた時だった。

「ん…??」

すぐ隣で眠っている男性が目を覚ます。

その顔を見て私は更に驚いた。

「…か、加藤??」

すぐ隣に眠っていたのは同僚の加藤だった。

私の声に気づき立ち上がる加藤。

「…市村??まさか…ここ…。」

加藤のその問いかけに、

「多分…。」

としか答える事が出来ない私。

「多分って…冗談だろ!?なんで俺が!?!」

「どついう事だよ!!!説明しろよ!!!!!!」

動揺をぶつける加藤。

「俺にも分からないんだよ!!!」

2度と戻りたくなかった

【空間】

に再び立たされた私は、

【絶望】

という感情に支配され、加藤への配慮など出来るはずもなく…
気づけば加藤に向かって怒鳴っていた。

【LEVEL:3】共通点

「ふざけんな!!!!!!明らかに前が巻き込んだら!!!!!!」
怒りに支配された加藤は私の胸ぐらを掴んで叫ぶ。

その時だった…

「な…何よ…コレ…。なんでまたここに??」

女性の声に驚き振り返る加藤と私。

振り返った先には…

さっきまで眠っていた女性が目を覚まし涙を溜めて立ち尽くしている。

そして、その女性を落ち着かせるように後ろから抱きしめる男性。

「みい…大丈夫だよ。」

男性は何度もそう呟きながら女性の肩に顔を埋めている。

「嫌っっっ!!!またあの【選択】が始まるの!?!」

女性は泣き叫んで男性にしがみつく。

私も加藤もその言葉に驚き顔を見合わせた。

(また!!!??確かにこの女性は今、【また】と言った...)
そう思っていると...

2つの画面が明るく光り出す...

重苦しい

【空間】

に注ぐその光は、あの時と同様：

この4人の疑問の一筋の答えのように思えた。

おはようございます

LEVEL：1参加者 市村 誠司さん
いちむせいじ

LEVEL：2参加者 望月 美咲さん
もちつきみさき

そして、お2人に協力をしていた

市村さんの友人 加藤 恭介さん
かたむつきまことすけ

望月さんの恋人 北村 歩さん
きたむらあゆむ

最初の画面にはそう書かれていた。

(LEVEL:??参加者:協力者:)

私がそう疑問を抱いていると…

「貴方達も参加者…だったんですか??」

涙声のまま望月が私に疑問を投げかける。

「貴方もですか??」

私は質問を投げ返した。

「はい。彼氏の歩か父親かで…。」

そう告げると望月は自分を抱きしめている北村の顔を見つめる。

そんな2人を見て私は無情にも命を奪われていった最愛の妻、慶子を思い出していた。

そして、そんな私たちを無視して画面が変わる…

LEVEL:3

開始です

その文字を見た瞬間…

「なんで俺が！？俺は関係ない！！」

画面に向かって怒りの感情を叫ぶ加藤。

この事態を体験した事のある私・望月・北村はこの言葉に鼓動が早まる。

すると画面は意外にも加藤への答えを照らし出した。

知りたかった…のでしょうか？この【選択】の意味を

その文字に加藤だけではなく4人全員が息を飲んだ。

文字はこう続ける…

だから我々を探した参加者2人。そして協力した2人。

ご招待はお気に召しませんでしたか？？

そう表示して文字は動きを止めた。

【LEVEL:3】LEVEL:3...???

「俺は、市村から話を聞いて信じれなくて本当なのか気になったから協力しただけだ！」

叫ぶ加藤。

【では…これで信じれたでしょう???】

忌々しいあの声が私たちの耳に響く…。

「何が目的なんだ!!」

まだ身をもってこの【選択】を経験していない加藤は怖いもの知らずなまま叫び続ける。

【我々に教えて欲しいのです。】

声はそう告げる。

「教えて欲しい??」

その言葉に望月が聞き返す。

【そうです。今まで決して崩れる事の無かった…人間にとって最も強かった絆…【家族愛】がなぜ今の世の中では崩れていつているのか…】

声はそこで話すのをやめた。

(確かに、ここ数年のニュースで取り上げられている殺人事件はほとんどもが家族のものによって家族が命を奪われるケースが多くなっている…だからといって、、、)

私が声の言葉に頭を悩ませていると…

「だから何なのよ！？私たちの家族を…私たちの大切な人の命を…貴方たちがこんな…。」

そこまで言うとその場に泣き崩れてしまう望月。

そんな彼女の姿を見るとあの時の情景が禍々しく私の脳裏に蘇る。

最後の時を迎えた慶子の顔が…

泣きながらも

苦痛に歪みながらも

必死に笑顔を見せていた

慶子の顔が…。

呆然と立ち尽くす私を横に望月の彼氏である北村が叫ぶ。

「そんな事は無関係の人間ではなく、自分たちの中でやればいいだろ！俺たちには関係ない！！」

選択される側を体験し、そして彼女の父親の命を犠牲にして生き残ってしまった北村の怒りが室内に響き渡る。

その叫びに声は答える。

【我々も貴方たち同様：犠牲者なのですよ。】

声はそう言つとまた止まる。

「我々??犠牲者??」

加藤が嫌味つたらしく口にする。

「それが真実なら、余計に俺たちを巻き込む考えがわかんねーよ！いいから、ここから出しやがれ！！」

疑問が疑問を呼び起こすこのやり取りに我慢の限界で怒鳴る加藤。

だが、声は何も答えてはくれない…。

「返して…返してよ！！お父さんを！！！！返して！！！！！！」

泣き叫ぶ望月。

「俺なんて本当に巻き込まれたただけだぞ!!」

怒鳴りつづける加藤。

望月を泣きながらも必死に抱きしめ続ける北村。

そんな3人の横で私は…

この意味不明な【選択】の行方がどうなるのかが気になりだした。

(前回なら…こんな押し問答はなかった…LEVEL:3の開始と宣告されてから時間が経ち過ぎている…LEVEL:3とは??)

そんな私を察したのか、声は再び話し出す…

【分かりますよ…その気持ち…。突如として失われる大切な人の命…。奪った人間への怒りと憎しみ。そして奪われていった命への悲しみ…。我々も経験したのです。大切な人間を…信じていた人間によって奪われた悲しみ…。】

憎き声がそこまで話すとその声とは別の声で…

【だから、我々は答えを求めてこの【選択】を行っているのですよ。邪魔はさせない。例え…私たち以上の悲しみを経験した人間であっても…邪魔は許されない。】

そして、数人の声が重なり合って…

【邪魔をするものには制裁を！！！！】

と悲痛な叫びにも聞こえるような声が私たちの耳に飛び込んできた。

【LEVEL:3】開始

「歩！！！！！！！」

スピーカーから聞こえてきた数人の叫び声に呆然としていた私を望月の叫び声が我に返えらせる。

望月の方に目をやると、天井から伸びてきた手によって運ばれていく北村の姿があった。

「みい！！！！大丈夫だから！！！！気をしっかり持つんだ！！！！」

北村はその姿が天井へと完全に消えてしまうまで彼女である望月を励まし、少しでも安心させようと必死に叫んでいた。

「あ…歩…」

そう呟いて座り込む望月。

「な…なんだよ今の手は！！なんなんだよ制裁ってのは！！」

突然の事に動揺とも苛立ちとも取れるような発言を繰り返す加藤。

そして私も前回の体験とは違うこの

【LEVEL:3】

と呼ばれている事態に頭が追いついていかない…

【邪魔をするものには制裁】

スピーカーから聞こえてきたあの声だけが頭を巡る。

【我々も犠牲者なのです…】

（一体なんなんだ？何も分からない。。。制裁とは…？何故、北村だけが連れて行かれた？何も【選択】などしていないのに…）
私が頭を整理しようと必死に考えていると…

「離せ！！！！！離せよ！！！！なんなんだよ！！！！！！」

今度は加藤が北村同様に大きな手によって天井へと連れて行かれた。

そして…静まり返った室内にはLEVEL：1とLEVEL：2の参加者の望月と私だけになってしまった。

（まさか…ここからが本当のスタートか？俺は北村と誰かを、そして彼女はまた彼氏と誰かを

【選択】

しなければならぬっていう事なのか??)

これから先で起こりうる事態を予想して、私の鼓動は一気に跳ね上がる。

望月もさすがにこの状況に頭がついていかないのか、座り込んだままピクリとも動かなくなってしまうている。

「何がしたいんだ!! 制裁とは何の事だ!!」

あまりにも不可解な事が続く中で私は…とつとつ冷静さを保つ事が出来なくなりスピーカーに向かって叫んだ。

その私の声に反応するかのように天井からあの手が伸びてきて…

私をあの時と同じように天井へと連れて行く…

下を向いたままの望月の姿が小さくなるのと同じように私の思考回路もゆっくりと停止した…

【LEVEL:3】制裁

【説明は必要ございませんね?】

【では…】

微かにあの忌々しい声が聞こえる…

「いやああああああああ!?!」

どこかで聞いたことのあるような悲痛な女性の叫び声が聞こえる…

体が重い

加藤や望月たちはどうなったのだろうか

俺は一体??

自分が置かれている状況が把握できないまま、一時の間静寂が続いた。

そして……

【市村様にはルール説明は必要ございませんね？】

突如、あの忌々しい声が私に話し掛ける。

【では…】

【選択さ・れ・て・下さい。】

その言葉に愕然とする私の目の前には…

あの大きな2つの画面。

【大丈夫です。ちゃんと貴方が選ばれないように人選してありますから…】

そう告げられ私は…

「ああ。これが制裁なのか…」

と呟いて画面に映る愛しい娘の姿を見つめる。

娘の姿を目に焼き付けた私は、もう1つの画面に映る困惑した表情の自分の母親の姿を見つめた…

「母さん…困らなくいいんだ。舞のこと、頼むよ。」

涙を流す母親にそう告げて私は目を閉じてあの歌を口ずさんだ

シャボン玉飛んだ

屋根まで飛んだ

屋根まで飛んで壊れて消えた

シャボン玉消えた

飛ばずに消えた

生まれてすぐに壊れて消えた

風々吹くなシャボン玉飛ばそ

飛んでいくのは…

消えたのは…

シャボン玉？？

それとも…？？

【LEVEL:3】 真実

【LEVEL:3の結果が全て出ました。予定通りあの4人は選ばれずに死にました。】

黒スーツが結果が書かれた報告書を持ってモニタールームへと戻ってきた。

「当たり前だ。邪魔者は必ず消えてもらわねばならん。」

「しかし…君の案はなかなか良い案だったな。選択側が選択される側に回る時の心情も垣間見る事ができた。」

2人の男がモニターから黒スーツの男へと話す。

【恐れ入ります。】

黒スーツは礼儀正しく挨拶を返した。

「だが、今後は邪魔者は現れないように何か考えねばなりませんね。」

また別のモニターに映る男がそう告げる。

【それは、考えておりますのでご安心下さい。皆様は、納得がいくまで…ご自分たちの中で答えが出るまでこの【選択】にご参加下さい。LEVEL:4の準備が出来次第、またご連絡させて頂きます。

」

黒スーツはそう告げるとモニタールームから退室した。

黒スーツの手の中にある書類には…

【LEVEL：3】結果報告

【LEVEL：1】参加者 市村 誠司 愛娘 舞と実の母親と参加。

選択者 実の母親 実の母親に舞を選ぶように勧め選択されずに死亡。

【LEVEL：2】参加者 望月 美咲 親友 智子と親友の麻里と参加。

選択者 智子 自分のせいで2人を巻き込んだ事を説明。選択されずに死亡。

【市村の協力者】加藤 恭介 妻 美恵子と息子 和樹と参加。

選択者 妻 市村を恨みつつも何も語らず妻を説得し、選択されずに死亡。

【望月の協力者】北村 歩 弟 裕と父親と参加。

選択者 父親 年の離れた4歳の弟を選ぶように父親を説得し、選択されずに死亡。

黒スーツの男はその結果の書かれた報告書を用済みとばかりに通路にあったゴミ箱へと投げ捨てた。

そして…手に残っている別の書類に目を通していく。

【LEVEL：4】参加者一覧そう書かれた書類には…

高村 洋介 息子によって最愛の妻を殺された男。

近藤 勇樹 母が父を殺し自殺し天涯孤独の男。

牧村 真菜 娘の育児放棄により孫を失った女。

佐伯 直哉 息子の妻によって息子を殺された男。

今井 和史 イジメを苦に娘が自殺。

以上5名。

そう書かれていた。

【今回は本当に良い研究結果が取れた。もう…お前達モニターに用はない。最後は私だけで楽しませてもらうとしよう。】

そう呟いて、黒スーツの男は

【LEVEL:4】

と書かれたドアへと消えていった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2336g/>

選択

2010年10月11日14時03分発行